

||||||| 雑 録 |||||

ポーランドとハンガリーを訪ねて

鈴木重靖

あ、月はここ
でも同じ顔を
していた

1

私は5月30日から6月22日までの間、海外研修のためポーランドとハンガリーを訪問した。

東欧諸国は私にとってある意味ではノスタルジアであると同時にまた冷く私に問いかけてくる他人でもあった。

ノスタルジア——それは二重の意味においてである。いうまでもなく東欧諸国は社会主義国といわれる国々であるが、社会主義は若い頃から私の心に巣くっているいわば心の故郷なのであり、私の経済学研究もマルクスの資本論からはじまっている。また私は5年ほど前チェコスロバキアを一ヶ月ほど訪れたが、その時のプラハの空の美しい夕焼が今でも忘れられないのである。

しかし東欧諸国は冷い他人でもあるのだ。それは単に異国という日本から遠く離れた地域を訪れた邦人が恐らく誰でも味わうであろうところのあのある種の異和感だけからきているわけではない。それはむしろ長い間別れていた親しい友人が再会した時の一種の異和感に似ている。一面では懐しさに充されながら、というよりむしろそれを期待しながら、他面では互に変わってしまった相手を感じ、かつ時に冷く分析しているあの心境である。そこでは普通の他人以上の冷い他人を感じることもあるのだ。

私は社会主義と資本主義というものを比較した場合に、そのいずれが経済機構としてすぐれているかといった問題とは別に、何か協同社会と競争社会という2つのタイプの社会を感じていた。少なくとも若い時代には前者に暖いロマンチズムを後

者に冷いリアリズムを感じていたものだ。しかしこれとは別に東欧諸国という言葉からうける何か暗いイメージもまたぬぐいきれないことも事実であった。この2つが私がポーランドとハンガリーを訪問する前のいわば期待と不安であった。訪問後の両国の印象は、この期待や不安に対する答えというよりも、両国がヨーロッパに属し、ひたすら欧米先進諸国に追いつこうとしている中進国の姿であった。そこには社会主義社会の暖かさとか暗さとかいったセンチメンタルな印象とは違った遅れたヨーロッパ人が生活のために闘っている現実の姿であった。そこには社会主義か資本主義かといった問題よりも、先進国と中進国、西ヨーロッパと東ヨーロッパという相違の方が印象的であったし、またポーランドあるいはハンガリーという民族のその民族性の方が強くあらわれていた。特にポーランドにおいてはそうであった。そこには何か日本人でありアジア人である私の入る余地はなかった。つまりこれらの国は私にとってやはり外なる存在だったのだ。

2

ポーランドは面積313千平方キロメートル(日本の84パーセント)、人口34.5百万人の東欧諸国では面積・人口とも最大の国である。またハンガリーは面積93千平方キロメートル(日本の24パーセント)、人口10.4百万人というアルバニア・ブルガリアにつぐ小国である。

私がこのようなポーランドとハンガリーを特に選んだ理由は、1つはすでに5年ほど前にチェコスロバキアとユーゴスラビアを訪ねており、もう1つは——こちらの方がより重要な理由であるが——私の今回の東欧諸国の訪問の目的が主として社会主義貿易における価格および為替問題であり、そしてこの面の研究および政策において両国は東欧諸国のうちではもっとも進んでいる国と思われたからである。

が、その直接の目的が価格および為替問題であったにせよ、いまここでこの問題を詳しく述べるつもりはない。この問題については、またの機会にこれをテーマにした研究論文で発表するつもりだからである。ここでは私の感じた両国の経済・生活・教育などの事情について述べてみたい。もっとも私の訪問したのはワルシャワとブタペストを中心としたものであり、両国全体のそれでないことを断っておきたい。

私は日程の都合でポーランドを先に訪ねた。北廻りロンドン経由であったが、乗り継ぎ機がかなりおくれたので、ワルシャワについたのはすでに夕暮れであった。想像していたのとは違って、税関のチェックはきわめて簡単であった。空港からホ

テルのある市の中心街までバスで20分ほどであった。ここではバスはどこまで乗っても1.5ズロチ(但し急行は3ズロチ)、つまりツーリスト・レートで換算して約14円であり、まずその安いのに驚ろいた。切符は車の外で、街のキオスクなどで求めることになっている。そしてその切符を自動車内に設置してある切符機で各自切ることになっている。このことをおこたると、時々廻ってくる監察官から50ズロチとられるとのことである。はじめ私はこのことを知らなかったのでチョットあわてたが、親切な人が切符をゆづってくれたのでことなきをえた。

ホテルはワルシャワの中心点を示す標柱のすぐ側にあり、また向い側にはワルシャワ第一の高層建築、文化宮殿がそびえたっていた。この宮殿は高さ200メートル、部屋数3288、総床面積13ヘクタールといわれ、1955～52年にソ連からポーランド国民への贈り物として建てられたということである。私はその後ワルシャワの街および郊外をずいぶん歩いたものだが、この宮殿の塔だけはどんな遠くからもみえたものである。しかしポーランド人はあまりこのソ連からの贈りものに感謝の意を表していないようである。というのはワルシャワの市内観光のポピュラーなコースにはこの案内はないようだし、陰口ではこれがみえないところ——つまりこの建物内から——の景色がいちばんよいといわれているからである。同じようなことはワルシャワ解放のとき犠牲になったソ連兵の記念碑についてもいえる。ワルシャワ解放のために闘ったポーランド人の記念碑だけがわれわれ外国人には紹介された。もっともソ連兵の記念碑のあたりは公園になっており、ワルシャワの人々がこの公園には大部たずねてきていた。

いったいどうしてこのようにソ連に対してあまりよい感情をもっていないのであろうか。私の察するところ、一面では歴史的なソ連とポーランドとの関係からきており、他面ではポーランド人の自由な精神からきている。歴史的にみてポーランドはロシアによって何回も分割・侵入されており、ロシアがソ連になってからもナチとの間でこういう事態があったことは周知のことだし、ポーランド解放後もボズナン事件におけるソ連軍の干渉などロシア人に対する侵略者としての印象が仲々ぬぐい去らないのだろう。またポーランド人の自由精神はかなりつよいようだ。この自由精神がまた民族精神と結びついており、時に排他的・攻撃的と思われることすらある。このようなポーランド人の気質がソ連にかぎらず外国のポーランドにおける干渉がましい、あるいは恩きせがましい態度に特に抵抗を感じるのであろう。ソ連の場合、その社会主義に自由・民主主義を欠く点がかかなりあり、このことが一層、対ソ感情を悪くしているといえるだろう。この点後に述べるハンガリーのほうがや

やゆるやかな感じがする。ハンガリーではあまり対ソ批判らしいことは、ポーランドほど聞いたり見たりしなかった。ポーランドでは学者や研究者もソ連や他の社会主義国の学者や研究者に対してかなり手厳しい批判を自由に行っている。

ワルシャワを紹介したパンフレッドは次のように書いている「市の魂は何か！ワルシャワは1つの力である。住民の個性であり、精神であり、よきにつけ悪しきにつけその活力である。これらがもっともきわだった特徴である」と。このパンフレッドの言葉は文字通りではないにしても一定の真実性を語っていることは事実である。

3

さすがに長旅で疲れた。一流のホテルにしては閑散とした部屋の中の寒々としたベッドであったが、横になると前後不覚に寝り込んでしまった。翌日はそのためか朝早く目が覚めた。ホテルのサービスは社会主義国としてあまりよい方ではない。チップをはづまないとボーイはあまりいい顔をしない。かつては社会主義国のボーイはチップを拒否したときいているが、それも遠い昔の話になってしまったようだ。いまでは資本主義国のボーイ以上にチップにはきたない。

ワルシャワは人口130万人、日本の神戸あるいは札幌市に相当する。しかしこれらの市よりも道路はひろく、ひろびろとした感じだ。いくつかの高層建築もあるが、しかし全体としては特に高い建物は少なく、近代的で清潔な感じの中層の建物の並ぶ街であった。自動車も百万都市としてはそれほど密集して走っているわけでもなく、多くはメイン・ストリートに並んで駐車していた。いたるところに緑の公園が散在しており、人々に憩いの場所を提供している。この街は第二次大戦の破壊によって街の85パーセントが灰塵に帰したといわれ、街のうちの残った部分にはいまなお弾痕が沢山みられる。しかしそれ故にこそまた戦後破壊された地域に新しい、近代的で計画的な、ひろい道路の都市づくりが可能でもあったのであろう。

もっともワルシャワには近代的都市という面ばかりがあるわけではない。古い建物をもとのまま保存しているところもある。これはどこの国でも多かれ少かれあるところの歴史ある民族の遺産を残そうとする意図からきたものである。しかし日本のようにある建造物だけを残そうとするのではなく、1つの街全体を残そうとしているのが特徴的だ。旧市街広場（といってもすべて昔のままで復旧されたもの）では今でも辻音楽師がおり、また野外絵画があり、私たちの旅情を楽しませてくれる。

4

目的の中央計画統計大学は市の中央より南10キロほどにあり、昼夜間学生（普通学生と勤労学生）と大学院学生で約10,000人おり、5つの学部と12のタイプの専門過程からなるポーランドでは最も大きい経済大学である。設立は1906年というかなり古い大学でもある。学部・学科・専門過程を簡単に紹介すると次のようである。

経済学部：政治経済、経済および地域政策、経済学および産業組織、建設および投資経済学、農業経済

生産経済学、専門過程：経済学および産業組織、農業経済、建設および投資経済学

経済学および社会発展学部：政治経済および経済政策、都市経済および住宅政策、社会政策および労働経済学、哲学、経済史

専門過程：労働経済および社会政策、都市経済、経済理論

財政および統計学部：政治経済、財政学、数学、統計および人口統計学、計量経済学、データ処理および計算、国民経済計画、国民経済の計画化と資金供給

専門過程：財政、国民経済計画、経済サイバネチックと情報、計量経済学と統計、データ処理と計算

国内商業学部：政治経済および経済政策、経済学および商業組織、組織およびマネジメント、生産技術および技能、経済法規、交通経済

専門過程：経済学および陸上交通組織、経済学および国内商業およびサービス組織

外国貿易学部：国際経済関係、外国貿易の計画と経済学、外国貿易企業の経済学、政治経済学と景気循環、国際法

専門過程：経済学および外国貿易組織

さて、この大学へ私を呼んでくれたのは外国貿易学部長のスルミツキー教授であったが、同教授とは到着日の翌日教授の研究室で会うことができた。教授は67才という老学究であったが、その柔和な顔の中に、いくつかの艱難に耐えてきたことを物語る厳しさを含んでいた。聞くところによると、第2次大戦中、フランスでドイツ軍と戦ったということであった。スルミツキー教授のはからいで若い助手のヤバシュチュク氏がポーランド滞在中私の世話をしてくれることになった。同氏は私のために必要な会合も準備してくれたし、また宿の心配もしてくれた。

私はスルミツキー教授、ヤバシュチュク氏を通して何人かの学者・研究者にであった。これらの人は新進の学者が多かった。むしろこのことは私に幸した。何故なら

彼らは感覚が新しく、かなり自由に、思いきった見解を述べていたからである。いまこれらの見解のうち特に印象に残ったものをいくつか要約して紹介しよう。

G. シャディック講師はコメコン経済統合の専門家というので、彼とつっこんだ話をしようと思ったが、どうも英語があまり上手でないので少し話しに手間どったが、それでも同氏の見解は大体つかめたし、またその見解が私のそれとかなり異っていることもわかった。私はコメコンにはポジティブな面とネガティブな面があり、前者はコメコン諸国の積極的な相互間の協力面であり、後者は対外的防衛的側面であると自分の見解を述べたが、これに対して氏は次のように答えた。コメコンにはネガティブな面は1つもない。すべてポジティブな面のみである。またコメコンをECのように1つの integration と考えてはならない。これはあくまで council である。council の場合、それは国家間の調整機関であり、outside の国々に対するのと inside の国々に対するのとでは基本的に区別はないという（これはおかしい—鈴木）。現在商業レートは1ドル=19.92 ズロチであるが、実勢は旅行者レート1ドル=33.2 ズロチに近く30~40 ズロチと思う。関税は1975年1月までは重要な役割を果たしてはなかったが、いまでは東西貿易においては一定の役割を果たしている。

次にあったクルチッキー博士は英語に堪能な為替相場を専門に研究している30中ばの中堅の学者であった。私のコメコン価格にかんする意見については全体として賛成であると前置きしながら彼の為替相場にかんする見解を次のように披歴した。現在のポーランドの為替相場は Multiple rate である。現在の公定相場は歴史的にきめられたもので、しかも任意のものであり、経済的に根拠づけられたものではなく、単なる計算上のものにすぎない。1ドル=3.32 ズロチは1ズロチ=0.222168純金グラム、1ドル=0.7350純金グラムから換算されたものである。1ルーブル=7.77 ズロチも同様である。旅行者レートは1ドル=19.98 ズロチであるが、Premiumがついて1ドル=33.2 ズロチになっている。しかしポーランド人が出国する時は1ドル50 ズロチである。1963年非商業レートがきめられたが、これは1ルーブル=19.70 ズロチと1マルク5.6 ズロチである。しかし公にされていないレートがあるが、これはつぎのようにして算出される。つまり公定レートに一定の係数をかけるという方式である。つまり $3.32 \text{ ズロチ/ドル} \times 17 = 56 \text{ ズロチ/ドル}$ 、といった具合である。1969年には $4 \text{ ズロチ/ドル} \times 17 = 68 \text{ ズロチ/ドル}$ となっている。

今後このような複雑な複数レート制をもっと簡単な実勢を反映したようなものにするにはどうしたらよいかというと、氏によると次のようである。国際収支のバランスをとり、構造的赤字国と黒字国との関係を解消すること、国内価格体系を改善

すること、などである。なおポーランド通貨に交換性を与えることは現在では不可能である。なぜならポーランドは赤字国で外貨不足に悩んでいるからである。かつてはこのような主張もみられたが今ではもうみられなくなっている。またポーランドは現在ガットに加盟しているが、資本主義国に対しては保護貿易の目的で関税をかけるが、財政関税的目的はない。氏もまたノシャディックと同じようにコメコンを経済統合ではなく Economic council とみていた。

5

6月11日にワルシャワを離れ、同日1時すぎにハンガリーの首都ブタペストにつく。ブタペストの空港でまず感じたことは、ここはワルシャワよりかなり暑いということであった。空港から市の中心のバスターミナルまで、専用バスがあり、ほぼ1時間近くで、料金は10フォリント、公定旅行者レートではほぼ140円であり、日本よりは安い、ポーランドの15円、急行30円からみれば高い。もっともハンガリーも市内バスは1.5フォリント、急行3フォリントで、日本円で23円、56円ぐらいだから少し安いがなおポーランドより高い。

ブタペストは人口205万、東欧で最大の都市で、この国の2割の人口がこの都市に集中している訳だ。ブタペストはワルシャワのように高層建築がない。全体として中世的雰囲気をとどめた都市であった。とくに国会議事堂は美しく、ロンドンのそれと優るとも劣らないもので、ダニューブ河の向う側に見えるそれはとくに美しかった。

私のとまったホテルは Hotel Inter-Continental といってブタペストでは最高級のホテルであった。アメリカ人の多いホテルである。前はダニューブ河（ハンガリー語でウルタヴァ河）で、更に河の向う側には高い丘とブタ城が見え、仲々よい眺望である。夜は夜でダニューブにかかっている鉄橋に一面電燈のデコレーションがつき、その背後にブタ城が照明によって夜空にクッキリと浮彫にされる光景は特に美しい。しかし何ととっても私にとってホテル代が高いのがひびいた。美しさもこうなっては半減してしまう。1日1万5000円ほどかかる。

全体としてハンガリーの物価はポーランドより高いようだ。すぐ前に述べたようにバス代、市電代も50パーセントほど高いし、ビールなども若干高い。食事をホテルですましたということもあるが、全体として私はほぼ同じ滞在期間にポーランドの倍近くの支出をせざるをえなかった。

6

到着日の翌々日、マルクス経済大学を訪ねた。古い風格のある大学だ。ここでまずヴィロ・クララ博士(女の学者である)にあい、ついで、シマイ教授にあった。シマイ教授は社会主義貿易論にかんする多くの著書・論文をあらわしているこの分野の著名な学者である。同教授は飾り気のない率直な学者で、1972年には日本を訪問するとのことであった。同教授の紹介で、アンドラス・ヘルナジ博士がハンガリー滞在中、私の世話をしてくれることになった。同氏を通して私は多くの学者、専門家、研究者にあうことができたし、外国貿易省、国民計画局、原料・価格局、世界経済研究所を訪ねる機会をえた。いまこれらの訪問先や話しあえた人々のうち特に参考となったものをいくつかピックアップして紹介してみよう。

まず外国貿易省の日本・オーストラリア・ニュージーランド局のA.フェレンチ博士に聞きたいいくつかのことについてみてみよう。

ハンガリーの関税政策は次のようだ。対社会主義国には無関税、発展途上国には特惠関税として、10%の関税、100ドル=4000フォリントの公式レートとして、100ドルのものに400フォリントの関税がかけられる。GATT 諸国に対しては最恵国待遇で20%の関税、100ドルのものに対して、800フォリントの関税がかけられる。アメリカ合衆国に対しては、非最恵国待遇として90%の関税がかけられ、したがって100ドルのものに対して3600フォリントの関税がかけられる。フィンランドだけは特別に無関税である。

ソ連との貿易がハンガリーにとって重要なのはソ連から安い原料輸入が可能だからである。たとえば銅の価格はアメリカから輸入すればトン当たり1000ドルである。ソ連から輸入すると750ルーブルである。これは公定レートで換算すれば(1ドル=41.7フォリント、1ルーブル=35フォリント)、それぞれ $1000 \times 41.7 = 41,700$ フォリント、 $750 \times 35 = 26,250$ フォリントとなり、ソ連からの輸入の方が安い。また原油についてみると、資本主義市場では、トン当たり120ドル、ソ連からの輸入原油は40ルーブル、したがってそれぞれ $120 \times 41.7 = 5004$ フォリント、 $40 \times 35 = 1400$ フォリントで、ソ連からの輸入原油の方が安い。なおハンガリーの原油価格はウエイトを考慮した価格となっている。つまり社会主義国からの輸入を75%とし、資本主義国からのそれを25%とすると、 $(1400 \times 75 + 5004 \times 25) \div 100 = 2301$ フォリントとなる。

次に原料・価格局のL. ラチ博士に聞いたところを記してみよう。

コメコン市場での価格基盤となる資本主義市場とは、つねに世界市場における中心的立場というわけではなく、ときにそれから離れたそれであることもある。たと

えば織物についてはスウェーデン市場が採用される。(過日北海道の小樽での社会主義経済学会で、私はコメコン市場での価格は資本主義世界市場価格を基盤としているという見解を披歴したが、若干の人たちはこれに反対した。この人たちは、このラチ博士の見解を知らなかったのだろう。) なおこの場合、景気変動とか、投機的要素とかは排除される。

しかし、コメコン市場での価格と、資本主義市場との価格に大きな背離があることも事実である。そしてときにこのことがコメコン諸国を利している。さきの石油価格、銅価格の例がそうである。ラチ博士の石油価格についての説明は前のフェレエンチ博士のそれと若干差があったが、次の通りである。

資本主義市場での原油価格はトン当り 100~110 ドルである。ソ連での国内価格は 18 ルーブルで、対外価格は 40 振替ルーブルである。1 振替ルーブル=1.2 ソビエト・ルーブルだから、ソ連の対外輸出価格は国内価格にくらべてかなり高いことになる。このソビエトの対外輸出価格は、ハンガリーの輸入価格になると更に高くなって、52 振替ルーブルとなる。52 ルーブルはこれをドルになおすと 68.4 ドルとなる。というのは公式レートは 1 ドル=0.76 ルーブルだからである。そこでソ連からの輸入価格が資本主義市場価格より安くなる。

(これは鈴木の見解だが、1 ドル=0.76 ルーブルはルーブルの過高評価だから、以上をフォリントになおしてみると、1 ドル=41.7 フォリント、1 ルーブル=35 フォリントの公定相場で換算してみても、ソ連原油は 1820 フォリント、資本主義原油は 4170~4587 フォリントとなり、いずれにしてもソ連原油が安くなる)。

国際経済研究所のベラ・ボイコ博士には貿易企業と生産企業との関係について聞いてみた。現在貿易企業は 20 ほどあるが、生産企業との間には 3 つの契約方式がある。すなわち pool 制、omnit 制そして commission 制である。pool 制は貿易によってえた利益を両者の交渉によって分けあう方式である。つぎの omnit 制は両者で半々利益を分ける制度である。そして最後の commission 制は取引高の何パーセントかを貿易企業がマージンとしてうけとるといふものである。この場合、危険負担はすべて生産企業が負い、貿易企業は全くこれを負わないというのが特徴的である。また現在コメコン内相互貿易の価格は前 5 ヶ年の資本主義世界市場価格の平均が採用されているが、最近になって、5 ヶ年の平均価格では石油危機のような場合、価格の実勢を反映しないので、かわりにもっと短期間をとれという意見もあるとのことである。

ボイコ博士はドル・ルーブルの相場、1 ドル=0.76 ルーブルは明らかにルーブル

の過高評価であり、さらに1ドル=41.7フォリントという相場もフォリントの過高評価であり、実勢は1ドル=60~70フォリントであろうといていた。が、全体としてコメコン内貿易ではまだ価格が問題というよりも、取引される商品の品質とか品種とかが問題の段階であるともいていた。さらに同博士の意見で興味を惹かれたのは博士がコメコンの諸方第にかなり批判的であったこと、1971年に発表されたいわゆるコメコン国際経済協力の「総合計画」は実現困難であるとこれを批判していた。

新経済制度への移行とともに貿易制度がどのように変わったか、このことについてM.シマイ教授からきいたところをかいてみよう。(1)貿易計画は国民経済計画(5ヶ年計画)の一環としてたてられる。このことはどの社会主義国でも同じだし、新経済制度になってもかわらない。(2)相互間の5ヶ年の貿易協定は守られる。これについても従来どおりである。(3)従来は貿易の割当制は事実上、価格を考慮することがなかったが、新貿易制度の後には企業のイニシャティブのもとに価格を考慮することができるようになった。また割当外の20%はhard currencyで取引できるようになった。さらに貿易取引において効率をはかることに大きな考慮がはられるようになり、取引時間の節約やdelivery conditionをよくする措置がとられるようになった。

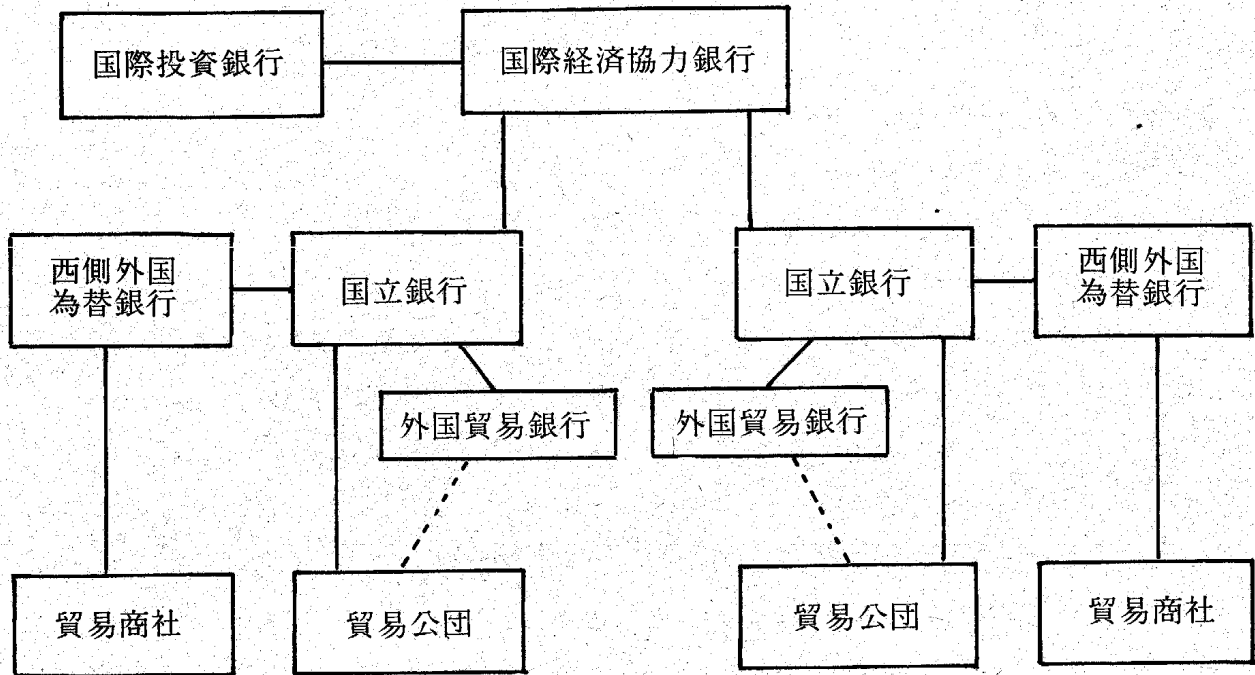
ハンガリーでは以上のほかに、新貿易制度においてはもし取引条件が悪ければたとえ割当内でも企業は取引相手を変えることができるし、もしそれが不可能な場合でも企業は国家から補助金をうけることができる。またバスの輸出などにおいて企業は直接海外取引できるようになった。

東西貿易も新貿易制度になってこれまでよりその重要性が認められ、その結果全体として伸びてきた。この場合市場機能が従来より利用されるようになった。たとえば輸出入とも企業間で競争するような措置がとられ、また関税の役割も従来より高められた。

なおM.シマイ教授によるとコメコン内諸国通貨の交換性賦与は近い将来までは不可能である。というのは外貨事情が悪いからである。東ドイツやチェコのような先進社会主義国といえどもその対外貿易の性格からして無理である。つまり東ドイツは社会主義国間貿易が主であり、また東西貿易でも東西両ドイツ間貿易は双務的であるし、チェコもまだ西側へ売るのが充分ないなど、条件はまだ熟していないということだ。

財務省のイムレ・ボサイ氏にあい、コメコン銀行とそれぞれの国の国立銀行、国

際投資銀行などの相互関係についてきいてみた。ここで詳しいことは省略するが、その相互関係を図示だけしておこう。



7

ここでポーランド・ハンガリー人の生活情況についてみてみよう。ポーランドの平均賃金は3500ズロチで、私があった若い講師の手取りは3000ズロチ、奥さんと共稼ぎの2人暮しでもって6000ズロチということであった。公式の旅行者レートで換算して、1ズロチがほぼ10円だから、大体60,000円程度だから決して高いとはいえない。彼の話によると、食費2000ズロチ、住居費600ズロチ、家具等3000ズロチ、その他400ズロチということだった。ハンガリーの平均賃金は2700フォリントつまり日本円に換算してほぼ40,000円というところだ。ここも若いところでは大体共稼ぎが普通だから2倍ほどとるとして80,000円だ。ポーランドより若干高いとしてもなお低いといわなければなるまい。ただすぐあとでみるように、若干ハンガリーのほうが物価水準が高いから、両国の間でそう差異はないとみなければならない。賃金格差は両国とも最高と最低で10:1で、そう大きくはない。

生活必需品は両国とも全体としてかなり安い、耐久消費財や一部消費財は高い。先にみたように市電、バスなどの交通機関の運賃は安く、ポーランド、ハンガリーでそれぞれ、1ズロチ、1.5ズロチ、1フォリント、1.5フォリントとなっている。

つまり10円から20円ぐらいのところだ。しかも乗換えない限りどこまでいっても同一運賃だ。食費も安い。パンは日本のより質が落ちるが、日本の半分ぐらいの値段だ。日本では学生食堂とか職場の食堂とかいわゆるまかないとかいう特種のところでしか見当たらないが、ポーランドではセルフサービスの大衆食堂(Bar)がかなりある。ここでは30~40ズロチで肉などの栄養ある品が腹一杯たべられる。ハンガリーでも大同小異である。また生ビールは日本の中ジョッキ位で7ズロチ、9.5フォリント、ビール一本が10.5ズロチ、10フォリント。ハンガリーの方がやや高いようだが、いずれにしてもわが国より安い。

しかし耐久消費財と一部の日用品はかなり高い。ポーランドでは白黒テレビで7,000~10,000ズロチ、カラーになるとその倍になる。ハンガリーでは7000フォリントから8000フォリントとなお高い。冷蔵庫は6000~10,000ズロチ、5000~6000フォリント、ポーランドとハンガリーで大体同じ位の値段である。

乗用車になると両国ともずいぶん高い。ポーランドの国産車(フィアットとの合弁企業)は、1500CC(正確ではないが)クラスで160,000ズロチであり、軽自動車で69,000ズロチで、日本より若干高いくらいだから、ポーランドの平均賃金からすれば、少くとも日本の1.5倍から2倍ぐらいの負担をポーランドの勤労者に与えていることになろう。

なお耐久消費財とはいいい難いが、上下そろいの背広なども比較的高い。私がデパートでみたところでは、ポーランドでは3500~4000ズロチのが普通クラスの背広のようだ。ハンガリーでは若干安く、かなりの巾がある。街で調べたところを書いてみると次のようだ。480, 580, 680, 780, 1790, 1870, 2010, 2560, 2670, 2810, 2860フォリントといったところだ。ここでは円価格に直してみても高いところで3万円少し、低いところで7000円ぐらいということで、全体としてかなり安い。なおこうもり傘がハンガリーで300フォリントと高いのには驚いた(もう少し安いのもあるかもしれない)。レコードはほぼ日本と同じ位の値段であった。

これらの物価はやはり変化していく。社会主義国には一部例外を除けば、資本主義国ほど著しい物価上昇、インフレーションはみられないが、全体としては上昇傾向にある。ポーランドでは1970年の物価上昇に対する暴動以後、価格は据えおきで、むしろ小売価格はその後僅かではあるが低下傾向にあった。が、それ以前はずうっと上昇傾向にあり、1960年から70年までの間に小売価格で10パーセントの上昇率となっている。1970年の暴動期には肉が18パーセント、魚が12パーセント、小麦が16パーセント、チーズが25パーセント、石炭が20パーセントと上昇している。ハ

ンガリーでも1970年から74年までほぼ毎年1.3~3.5パーセントの上昇が記録されている。とくに燃料は1974年には対前年比で17パーセント上昇しており、原料品においては24パーセントといちじるしい上昇をみせている。

ハンガリーの学者のいうところによれば、物価上昇の原因は、原料品の値上りであり、これに労賃の上昇が加わっているとのことである。このような原料品の値上りはハンガリーの貿易においてその交易条件を一貫して悪化させる原因となっており、1970年—100.8、1971年—98.6、1972年—99.2、1973年—98.8、1974年—92.5パーセント（いずれも対前年比）となっている。

このようにポーランドやハンガリーにも物価上昇はあり、それが著しいときには暴動がおきるほどである——日本では物価上昇で暴動はおきるであろうか——が、しかし全体としてはそう著しいものではないといえるであろう。

住宅状況はどうであろうか？　ポーランドでは家賃は2DKで600ズロチで、組合に入って、順番を待って入居できるとのことだ。ハンガリーの統計によると、住居状況は、1DKのものが全体の7.8パーセント、2DKのものが59.3パーセント、3DKのものが32.9パーセントということである。そして同じ統計によると家について住心地がよいというのが38パーセント、まあまあが12パーセント、悪いが53パーセントとなっている。以上からして住宅状況はまだ決して満足すべきものでないということがいえる。

が、このように住宅の不充足さ、耐久消費財などいくつかの消費財についての物価高などがみられるとはいえ、ポーランド・ハンガリーとも、生活状況はまあまあ安定しているといえると思う。更に老後の保障や、比較的ととのった休養施設などを考慮すれば、とくに贅沢を望まないかぎり、老後の不安なしに暮していけるのではないか。両国ともそう低くない経済成長が記録されているから（ポーランドは10パーセント以上、ハンガリーは6~7パーセントの年成長率）、もう10年もすれば両国ともかなり安定した生活が実現するといっているのではないか。ただ東欧諸国、とくにハンガリーではいわゆるジプシー問題があり、これをどのように解決するかはなお時間がかかりそうである。

8

最後に結びとして一言しておこう。私がうけた感じでは、全体として、ポーランド、ハンガリーともそう悪い国ではないし、彼らは彼らなりに、生活の安定にある満足を感じているようにみうけられた。そして、あるいは少くとも経済的安定性と

発展という観点にたつならば、人類の未来はこの種の経済制度をさらに一層量質ともに発展させる——ここで量質とは、物質的豊さにおいてである——ことであるかも知れない。

しかし、私が両国で感じたことは、やはり両国とも私にとっては外^{そと}なるものであり、私の国あるいは私自身とは距離のあるものであった——あゝ月は同じ顔をしていたのに。またたとえ両国の経済の発展方向が日本のそれと一致する面があるにしても、私にはなお次の問が残っている。それはもっともよい経済制度はもっともよき社会制度であるかということである。両者が一致するならば、われわれ経済学者は楽道家でありうる。また両者が別個の問題である場合もあるいは救われるだろう。しかしいずれでもない場合、われわれ経済学者はどうしたらよいのか。われわれは経済以外の問題にも責任を持たなければならないのであろうか。恰度発明家が自己の発明品の結果に責任をもたなければならないように。私は知らない！

(1976. 9. 脱稿)